第廿一年　統一　新年號

（第二百六十三號）

新とは進むといふことではないか。新とは更るといふことではないか。新とは始めるといふことではないか。新とは鮮かといふことではないか。新とは麗いといふことではないか。之れを譯すれば、勇猛である。精進である。元氣である。整理である。努力である。建立である。創業である。發芽である。清潔である。精錬である。修養である。旭日である。春である。更に人に約すれば懺悔であつて、併せて眞信仰に活きることである。之れを大正六年の新年の辭とする。……（一記者）

發行事務取扱所　東京小石川白山前町　統一編輯所
◀振替口座東京三三五三三番▶

金枝玉葉御繁榮

春の初の御悦び木に花のさくがごとく、山に草の生ひ出るがごとしと、我も人も悦び入て候（上野殿御返事）

紅のこきよしをつたへけりけしの花

出藍や水よりもつめたき氷哉

（同書聖語を綴ふ）

（同）

和歌　遠山の雪　清岡　子爵選

軍人精神と日蓮主義　本多日生

本尊呼吸法　矢野茂

優しき心　岩野直英

新年感、畠山君に答ふ　井村日咸

機微譚語　山根青村

死の問題と其解決　森下馨

窪田鐵橋君の句撰取を讀む　忍水

統一俳句　日蓮聖人御傳　松尾蕉城

遠山雪

ひさかたの雲井はるかに富士のねのゆきをあふぎて御代いはふかな　浅草區　篠崎芳子

見渡せば雲井はるかに遠山も今朝めづらしく雪ぞふりける　新潟縣　藤田鶯園

しろかねの雪の山々うましきもなほめてく見ゆ朝の富士かな　白山　松尾周女

朝起きて思はずむかふ眺むれば筆にもつきぬ遠山の雪　美作　淺沼惠海

白々とげにうつくしく天つ日をうけて輝く遠山の雪　千葉東金　笠見音太郎

靜なる八重の潮路を行船のかすかに見ゆる島山の雪　大阪市　長尾猶之助

朝まだき遠きみ山にふりつもる雪のゆたかに見るそうれしさ　越前　秋葉純一

かくまでの高根も知らて過にしを雲より上に雪を見るかな　日本橋　窪田貞二

積む雪にあのもこのものを見渡せは厚衾して笑ふ遠山　千葉縣　梅澤天純

峯つゞく中に脊見ゆる遠山の鹿の子まだらに雪そつもれる　山武　小川只助

初日さす遠き深山の雲見れは徐ろに思ふもろこしの原　山武　並木博

そらはれてさやかなるかな白妙のみねのかさなるよもの山々　京都　竹本蓬一

遠山の雪に初日の照り映へて麓の里の豐かなるらし　名古屋　有田信子

松島はいかにそあらむ空晴れて遠山雪の見ゆる今朝しも　名古屋　橋本鵲園

遠やまはかすみかくもか白妙の花にもまさる今朝のはつ雪　千葉東金　小川藏司

文を讀む窓おしあけて遠山の雪みる今日そのどけかりける　越前山内　森川茂

富士のねに雪はつもりぬ武藏野の野邊はいつしか冬かれのして　因幡大孝　森原貞聲

昨日今日火桶したしむうとものげに比叡の高嶺はましろなりけり　浅草　山根日東

ほの〳〵と晴れ行く朝の遠山に雪こそつもれこゝろ長閑かに　越前鯖江　山本龍雲

○佳作

うつもれし庵こそ見えね遠山の雪のうちにも烟たつなり　山口柳井　窪田利兵衛

君か代の年のはしめは春またてをちの山のは雪もかすめり　本所區　勝田宣和

子爵清岡長言選

△次回題課（八月廿九日）「谷梅」投稿規定　一用半紙半切　一書一題一人三首宛とす。字體は正しく謹（他用書くべからず）め一枚毎に必ず住所姓名を記すべし

うら〳〵と日のさしのぼるとほ山の雪むらさきに見ゆる朝かな　白山　松尾英四郎

風さゆる霞か浦をこきゆけは筑波高根に雪そうつれる　下總小見川　星野聖祐

豐としのみつきなるらむおち方の山またやまにふれるしら雪　天鹽國　崎野平三

外國の學ひも終へて故里の雪の遠山見るそうれしき　名古屋　有田日篤

あらたまのとしの初日のかげさして雪もはえある不二の遠山　京都　中野正甫

雲ならぬ越路の空の白妙は遠の山々雪のふりけん　伯耆　窪田純榮

外國の人もうれしく仰くらむ浪路はるかに富士の白雪　山武　並木うめ

うら〳〵と初日ゆたかに此の年のみのりをしめす遠山の雪　遠江　佐藤弘風

豐かなる御代のしるしは遠山のみねにつもれる雪にこそ見れ　備前和氣　原田日勇

海の外のみくにの山もとよとしのしるしの雪や降りつもるらん　千葉縣　渡邊乾航

選者の筆天位に星す、受取の上は報知あれ

○人

志賀の浦を遠さかりゆく朝とてに比良の高嶺の雪をこそ見れ　下谷區　小柳英夫

○地

ふもと路はけふりに暮れて遠山の入日に匂ふみねのしらゆき　千葉潤井戸　中村操

○天

雲とのみつねは見えたる遠方の山は雪にそあれはにける　播磨　森下照蠻

○

ふるゆきにうもれなからもをちかたの山はたかくそあふかれにける

選者

軍人精神と日蓮主義

本多日生

五　將軍と聖人の一致點

軍人精神を分解すれば、命懸で正義を守り、君國の爲に盡すと云ふのであるが、是が吾々の主張する日蓮主義とどう云ふ關係を有つかと云ふと、是は全然一致して居るのであります。松陰先生の行はれた事、乃木將軍の行はれた事と、日蓮主義は不思議な程一致して居ります。命懸で事をすると云ふ點は、日蓮上人の傳記をちつとても知つて居れば分るが、上人は、身は輕し法は重し、即ち身を殺して法を擴めると云ふことを常に申されたのであります。命を惜まないと云ふ點に付ても、松陰先生同樣、首の座に引張り出されゝば行き、牢に入れられれば牢に行く、何處に行つても正義の心は少しも變らない、今更腹を立つたり心がいらついたりする事はない所謂正義を守つて一點動せざる所の精神であります。其處に非常に松陰先生と相關係する所があると思ひます。松陰先生は至誠天地を貫くと云ふ確信を以て江戸に來て德川を說いたが、如何なる譯か德川は動かない、遂に先生は刑罰されましたが、其絕筆を見ますと『學問微薄にして至誠天地を感格する事出來申さず、以て今日に立至り申候』と書いてある、學問と申しても唯今のやうに理屈を並べる學問でない、精神的修養を積んで至誠を磨くのでありますが、至誠の訓練足らずして、遂に德川を動かす事能はずして處刑せられる事になつた、學問微薄にして主誠天地を動かす事の出來ないのは、何も人を恨む事はない松陰の修養の足らぬ結果であると云ふ、此の邊は日蓮上人と同じであります。昨日此處に龍の口法難會の演說があつて私は出なかつたが、あの龍の口に於ては上人が全く首の座に座つたのであります。或人は評して乃木將軍及び松陰先生は大和魂であらうが日蓮上人はさうであるまいと云ふても、それは間違つて居る、其の精神の握つて居る點は皆同じであります。松陰先生、乃木大將等は軍國の爲め、

一方上人は道の爲であつて、唯自分が無益に命を捨るのではない。之等は皆其處に國を思ひ道を思ふと云ふ精神が本統に充實して居た人であります。日蓮上人も國を思ふて遂に龍の口に座つた時は『是程の喜びを笑へかし』と、泰然自若として居られた、所が不思議な事には所謂至誠天地を感格せしめたと云ふべきか、江の島の方より月の如き光が尾を引いて刑場に飛んで來たと思ふと、雷鳴霹靂天地を動かしたが爲に、三百人の等は大地にひれ伏したと云ふ事實がありますが、是は至誠天地を感格せしめたと云ふのであります。而して前の旅順の二龍山の御談（伊豆少將の談話を指す）も同じであります。即ち軍旗を取還しに行く爲に遂に砲臺を取つたと云ふのは、是は決して力で取つたのでない、所謂精神を以て取つたのであります。所謂至誠を以て日本軍は勝を制して居るのであります。又最後の五分間と云ふ御話がありましたが、是も至誠であります。其至誠の感動する所、遂に砲臺を落し、戰に勝つと云ふ結果を現はして來るのであります。日蓮上人の正義は最後の勝利であると云ふ確信を以て進む所は、乃木將軍、吉田先生、或は山鹿流の至誠と云ふものと少しも違はない。今日の如く利害を打算して行くのでない、至誠を以て天地を動かす、而して倒れて後ち已むと云ふことは、非常によく一致して居るのであります。

日蓮上人は北條に向つて、日本は天皇を中心としたる國家であつて、君が政權を握つて居るのは間違つて居ると云ふと、北條に於ては、日蓮上人は唯坊主と思つたがさうでない、彼は佛法に事を寄せて政道を亂るものである、鎌倉を倒ほさんとするものであるとして終に首の座に引出された、併し上人は是程の喜びを笑へかしと云ふて居られるが、乃木將軍に於ても最期は滿足で有ませう、一切の事を處理されて、其遺書を見ましても一點不滿な事はない、行くべき道、欲する所に進んだものが最後の死であつたのであります。唯空しく終つてはいけない、自分の死は自分の道を立てる所以なり、將軍は謙讓なる方でありますから、遺書等はないが、矢張り士風の頽廢、國民精神の頽廢を歎かれ大和民族の精神の腐敗に向つて覺醒を促すと云ふことを考へられたに違ひないと思ひます。どうしても吉田先生の思想、山鹿先生の思想から來、又其修養から來たので、決して一時の感情に驅られて死なれたのでない、此の死を以て日本固有の大和魂の復活を圖ると云ふことを考へられたに違ひないと思ふ、其處は上人が最後の死に於て喜びを歌はれたと同樣であります。將軍が自刄せられる二時間前迄は陸軍將校と一緒に蕎麥などを上つたが、其模樣などは今目前に死の迫つた事を考へて居らない樣で、是は眞に安心立命が出來たと云ふのであります。斯う云ふ點は上人と實によく似て居ります。

六　松陰の包容と法華門の僧

尙一言したい事は山鹿流の學風は非常に廣いのであります或一つの學問に囚はれてはならない、日本は深遠謀慮の國でありまして、あらゆる思想を入れ、さうして國を豐にしなければならぬと云ふ、即ち中朝事實を見ますと、狹隘なる思想を戒て居る、吉田先生の思想も其通りであります。斯う云ふ手紙があります『學問の筋目を糺し候事が誠に肝要にて朱子學じやの陽明學じやのと一偏の事にては何の役にも立ち申さず尊王攘夷の四字を眼目として何人の書にても何人の學にても其長所を取るやうにすべし、』又『魚屋八兵衛の類は實に大切の人なり各神牌を設くべし』と。京都に八兵衛と云ふ魚屋があつたが、是が頗る元氣な男で、勤王の士が集つて德川の勢力を抑へ勤王討幕の軍を起さうとして秘密會議を開く、其時色々相談して方案が立たないで困つて居ると、八兵衛がそれ位の事が分らないでどうすると言つて士氣を皷舞する、勤王の士も八兵衛に皷舞せられて勤王の大志を爲したのであります。それ故祀る時は勤一等にしなければならぬと云ふことを書て居るが、玆が面白い所で所謂至誠を以て勤王家の間に交り、勤王家の精神を皷舞して大志を遂げしめたといふ上から其頃上下の間別の觀念の強い時に之を排除して一魚屋の八兵衛をまで大に迎へて居るのであります。又松陰先生は佛敎の事は餘り知らないが、牢に入つた時に日蓮宗の坊さんの日と云ふ者と一緒になつた、さうして話をして見るとよく分る此坊さん勤王の志もあるので、日蓮主義は面白い、下手な儒者よりも立派で勤王の大義をよく了解して居ると感ぜられた僧日　が牢に入れられたのは祈禱か何かやつて、所謂迷信を皷吹した爲で、其處はいけないがなか〳〵確つかりして居た僧であつた。然も松陰先生より前から牢に居るので色々先生も世話になつた、この事は高杉晉作の所に手紙を送つて居られるのでわかる。其の手紙に、私も今迄佛敎は知らないから一概に詰らないと思つたが、牢に入つて法華の坊さんの話を聞くと、佛敎と云ふものはなか〳〵確つかりしたものである自分も時間があれば學びたいがと云ふことが書いてある、又妹の千代と云ふ人に送つた手紙にも、觀音經に付て面白い事を書いてあるのであります。

七　將軍の思想と日蓮主義

又乃木將軍が思想の紊亂を歎かれた名高い話がある、それは德富健次郎君に學習院で講話をして貰ひたいと頼んだ、併し德富氏はトルストイの思想を說いて、氏が其思想の感化に依り田園生活までして居るので、是は穩かならぬと考へまして、自ら乘馬で德富氏の所に行つて講話を斷つたと云ふことでありますが、思想問題に付ては常に注意をして居られたのであります。又一般の佛敎を嫌ふのも無理はない、唯議論ばかりして精神の極らないものは乃木さんは嫌ひであります。故に今後乃木將軍の此の精神に報ひて行く上から言へば日蓮主義が宜い、是は國民の思想を鼓舞作興するに適したものであります。多くは見臺を叩いて叫ぶの流義でありますが、乃木將軍を追悼するには實行主義たる日蓮主義が宜い、健全なる精神の確立を目的とする日蓮主義を以て國民の思想を鼓舞することは將軍も地下に於て喜ばれる事と思ひます。而して同時に日蓮主義の敎務家も見臺を叩いて叫ぶばかりするやう

な事はせず、實際に仕事を成しとげるやうにしなければならぬと思ひます。

八　靈の實在の觀念と將軍

以上は松陰先生の言つた事を以て乃木將軍の靈に報ひ併せて將軍の思想を忖度して我主義に及んだのでありますが、更に一言して置きたい事は、是等の人は決して今日人々が思つて居るやうな無宗教者ではない、松陰先生でも死んだら魂を祀つて呉れと云ふて居られる、即ち留魂錄と云ふものを書いて居られる。而して乃木將軍の辭世の歌もさうであります

『うつし世を神さりましゝ大君のみあとしたひて我はゆくなり』

先帝は御崩れになつたが御靈は御居てになる、自分は御跡に付いて御奉公しなければならぬと云ふ、所謂實在の觀念であつて、これは矢張り宗教的の觀念であります。即ち吉田先生でも乃木將軍でも、今日の所謂無宗教的思想とは全然違つて居るのであります。山鹿先生もやはり其通りであります而して今回乃木神社が出來ると云ふことでありますが、矢張り靈の不滅と云ふことを信じなければならぬ、みあとしたひて我はゆくなり、と云ふことは靈の不滅を意味するもので、將軍を慕ふぐらいの人は此意味を心得なければならぬ。松陰先生も、人の魂の極らないのは、死んだらそれ限りだと思つて居るから極らないのである、人は靈の不滅と云ふことを信じなければ、武士の魂は極らない、と斯う云ふことをはつきりと言はれて、それから先祖を大切にせねばならぬ、其家には魂が傳つて居ると主張して居られます。之を以て見ますと即ち是等の人々は今日の無宗教主義者とは違ふのであつて、此の靈の不滅、神魂の實在といふ精神が向上して吾人の主義に合致して其處に活きた完全なる宗教が現はれて來ると思ひます。

今日私はほんの附足りに其處に登りましたので、伊豆少將閣下の御話に依つて、吾々は乃木將軍の事を知ると共に、將軍の靈も地下で御喜びになつた事と思ひます。（完）

詩　　大阪　山田秀太郎

時維嚴冬寒風鬱鬱又凜凜焉當此時余轉感想於日蓮大像
聖人之佐渡塚原鎌倉之事此錄書作以似於鎌城松尾兄併
乞正

捲雪北風鬱塚原　荒廬無戸法衣翻
燈然獨座握經卷　思國思民徹骨魂

圓本門法華題目

否去人間來者泰　木門至善今經頼
佛神無及法華貴　天地不如題目大

△本誌二頁六十一號一〇頁、詩欄末二行三句、誤衍

本尊呼吸法

△左は永住町妙經寺思恩教林にての講話の大要なり▽

大審院檢事　矢野茂

新年お目出たう　いかにも新年は瑞氣滿ち、何となくすがすがしき氣持ちのよいものである。しかし只お目出たい〳〵で年ばかり重ねてもつまらぬ、新年と共に信あるものは一層信をつよめ、無信者は新たなる信仰に活き、かくて新年は眞にお目出たいと思ひます。

昨年は立太子御式の御擧行あり、本年は其第一年として光榮の耀いて居る年であります、歐洲は大戰亂にて悲慘の極を盡して居ります、之れと相比して我邦人の幸福は甚だ喜ばねばなりませぬ。然るに曩に平和問題が一寸持ちあがつて、スグ經濟界は影響を受けました、これが眞に平和の曉には我諸面に於ける影響は如何でありませうか、我々は今より此に覺悟を致して行かねばなりませぬ。就ては我々は之れに堪ゆるべく身心の健全を計るに就て方法も必要でありませう。私は此の考に依りて本尊呼吸法と命名した信仰を基礎にした身體健全法を研究致しまして、之を發表致す次第であります。

此の呼吸法は所作に於て示すべく、言語を以ては充分眞意を披瀝しかねますから、本日は大體の精神だけお談を致し、此法を御研究下さる御心の人がありますれば當寺に申込み下されば自分は出張してお示し致してもよろしい。さて呼吸とは出す息、引く息で此の調節を計るのである、空氣中には窒素炭素の重なる原素があつて、尤も此外種々の原素もありますさうだが、それは專門學者の說で大體は二原素で、炭素は火の如く燃え、窒素は油の如く燃料を供する次第ださうですでありますから此の呼吸に依りて活きて居るかぎり其調節をはかり而して命數の延長を計るのは我等の身體を愛する眞意であらうと思ひます。呼吸法といつても只呼吸ばかりではだめです、食物に於ても精撰するがよろしい、即ち日本人の常食たる菜食主義は尤もよろしい、これは諸種の實見に於て歐米人も認めて居ります。しかし此の菜食の佳いことは今頃學者が騷いで居りますが、實は三千年の大昔に釋尊に依つて唱道されて居ります。釋尊が諸所なカ面に善說をされて居られます中に、矢張り、呼吸調和の一門もあり、食を調へ、眠りを宜しくするの義も說かれて居るのであります。これ等は私の呼吸法に一の基礎となつて居るのであります。

私の呼吸法には動作の以前に心の靜調をせねばなりませぬこれは佛道の上から日蓮上人の御敎に基き、我身體は今は因

位に屬して居るも矢張り、佛果を冥具して居るもの、我體は即ち當體蓮華であると觀念して、我身體は其信念宜しきを得ば本有の尊形に合致するものとの確信の下に而して口には題目を唱へねばなりませぬ。口に題目を唱へることは精神統一の最良方法にして其事實の鎖であります。

呼吸の調節に就ては佛教に既に說かれてありますが、鼻より吸ひ、之れを暫らく腹中に深く藏へ而して口より靜に細く長く出すのであります、而して心持としては口より腹に入り臍より出て、又口より入るといふやうな氣分でよろしい。

其呼吸を始むる用意としては座して手を組み膝にのせ、眼をつむり、而して行ふのであります。呼吸を腹に藏して居る中に釋迦牟尼佛、上行菩薩無邊行菩薩の御名を唱へ奉る、それより漸次に一呼吸中に一劃づゝの本尊中の御名を唱へ奉るのである。それから四天王に至つては型の如く動作をする（此時形をさゝも略す）それから拳を腰の横の處にあてゝ天照大神八幡大菩薩を唱へる、最後に日蓮大聖人の御名を唱へる。而して此間、常に題目中に立てる觀念は必要でありますかくて呼吸と動作と精神とに依りて氣分よき健全法を得らるゝのであります。

記者曰く、此の呼吸法の談は動作と相待つものにして、筆記に寫し出しがたし、此には氏が日蓮主義の信念に座して呼吸法を實行されつゝあることを報道するに過ぎず又水浴方法等も談されたるも同樣にて筆記には寫しがたし。

思恩教林初頭の活動

千葉　桑太郎報

例年に依て一月六日新年初會大講演を淺草區永住町妙經寺に開く、定刻午後五時半開會松尾波城先生登壇、新らしき構想の下に四恩を說き、恩の一事が人道々德の中心なるを說き思恩教林の目的の宗教的に權威あり、世間的に倫常の旨實に契へる所以を說いて降壇。次に矢野大審院檢事閣下は本尊呼吸法の題下に日蓮主義信仰の下に活動的靜座法を說かれて降壇。次に宮岡海軍中將閣下は愛孫の逝去に就て其實際的愛慈の念より說き起し靈の絕大にして不滅より佛陀光明の常照せるを熱辯し降壇。次に佐々木照山先生は歐洲戰後東亞國民の覺悟と題し東西兩洋の道德の根底を說破し我國民の醒覺を叫びて降壇。次に會主野口權大僧正は、先づ當日敎辭を寄せられたる佐藤海軍中將閣下、犬養毅先生、本多日生猊下の三書に就て要領の解說を述べ、亞いて明敎確立國師養成の本題に入り縱說橫說して多大の法益を與へて降壇さるゝ尙餘興あり十一前解散す。聽衆約八百人、數種の冊子、福引粗果を呈したり。

▲本誌次號豫告　思恩教林に於ける　宮岡中將閣下の演說

○優しき心（三）

海軍造兵大監　岩鄕直英

■さうすると、壽量品は釋尊御獨りの長廣舌でないやうてある、我等の身に引きゝ當てゝ思ひ當ることがあるやうてある、壽量品の眞僞は、我等自身に判斷し得るものと思ふ、先づ我等の親師匠が死せんとするときは、名殘を惜むか惜まぬか、愈々死に別れたならば、追慕するか追慕せぬか、是には論はないことてある、**否なと言はゞ汝は恩知らずてある。**

■成る程、私も父に死なれた後は、父の恩を母に報じて居りましたが、母も死にましたときは、實に孤露にして復た待怙なしの感があり、追慕の念增し孝行の心盛んになつた實驗を有して居ります、恩師の死去に逢ひましたときも、同じ感がありまして、其の人格を慕ひ、報恩の念が實行上に表はれた程度は、先生の生前よりも多くなつた經驗を有して居ります、諸君に於てもそんな事がいくらも有るに違ひない。

■又我等臣民が「君が代は千代に八千代に」と申し上げるときゝ、御上では「いそしむ民のあればなりけり」と仰せられますのは、何てあるか、一つは皇祖皇宗の深厚なる恩德を謝し奉る心てある、一つは世々その美をなせる臣民の忠孝を讚め給ふ情心である、何れも追慕の優しき心より出てゝ、限りなき喜びとなつて居るのてあります。

■故に釋尊が戀慕渴仰の心を萬德の源とし、御自分の生死なき滅度を以て、此の心を發達せしめる緣とすると云ふことには異存はないです。

■或る人は言ふて有らう、戀慕渴仰は善心を起すものてあると云ふのは異存はないい、併し夫れは釋尊てなくてもよろしい、父母でも師匠でも又は主君でも、戀慕渴仰さへすれば善心の種になると、然り大いに然りてある、然れども大小を辨へねばならぬ、小を戀慕するものは善心も小てある、大を渴仰するものは善心も大てある、釋尊は世界第一の大慈大智大力の御方てあるから、釋尊に依て第一の大善を得るのてある、此の大善を有して居れば、所謂日本一の富めるものてある、之を父母に進め主君に捧げ弟子に分ち、尙ほ一切衆生に施こしても、御釣りが來るのてある、そら父母が死んだ、是から戀慕渴仰して善心を起そうとするのは、已に手遲れてはないか。

■此の優しき心は、一名誠の心と言つてもよい、或る聖人は、其の心を誠にせよと言葉のみで、おしまいに成つて居る、釋尊は其の心を誠にするには、おれがして呉れる、命に懸けて引き受けると云ふことてある、實に釋尊を粗末にしては濟まない。

■私は壽量品を考へて、最早不信の心を持つて居れなくなりました、熟々法華經の初めから顧みるに、一大事因緣とあつたのは、佛がちやんと我等の心の本性に思召しが有つたのて有らう、開示悟入と

あつたのは、後に壽量品を御覧きになる御決心が有つたので有らう、一佛乘と云ふのも、略ぼ見當が付いたやうに思ひます、私は繰あつて壽量品に接したのを喜び、釋尊を教の主とすることを承認するものであります。

■戀慕渴仰は又た實在を承認せねばならぬ、何も無いと知つて渴仰するのは不合理である、俗に戀と申すものでも、現に戀人が家の内に居ることを確認し、或る事情の爲めに其の家に立ち入ることを許されない場合に、垣一重を鋼鐵圍壁のやうに思つて慽みるのである、戀人の實在を認めての戀であります、我等が祖先を祭るのに、若し祭壇に祖先の實在を否認するならば、位牌も唯だの物品である、禮拜するには當らぬ、打ち毀してしまうがよい、そんな事をする人達が邪道に滑り落ちるのである、又た祖先は火の玉のやうな靈魂と考へるのでない、生きて居る人間と相違のないものを思ふのである、夫れが見へない爲めに渴仰し、報恩の爲めに追善するのである、故に私は父母師匠等の死後と雖も、情に於て其の人格實在を承認するものであります。

■靈山會當時の弟子等が、釋尊に御別れをしたときは、定めし非常なる渴仰の情を以て、釋尊を本佛とし其の實在を信じたて有らう、然るに今の我等は直接見ることを得て居ないから、夫れ程には參り兼ねる、朧氣ながら信ずるので有つて、何となく飽き足らず思う、釋尊當時の弟子のやうに、本氣に釋尊を御慕ひ申す心に成つたならば、嘸ぞ嬉しからうと考へる、則ち我等は情に於ては不充分なるを遺憾とするが、義に於ては充分に教主釋尊の實在を認めんとするものであります

■義理づくては惡いことはないが、まだ夫れでは身にしみじみと嬉しい感じはない、慕つてこそ遺へば嬉しい、慕はないものなら誰に遺つても格別嬉しくはない、然し已に教の主として承認する以上は、思ひ切つて未だ遭ひ奉らざる釋尊に情操を捧げて見たいと思う、どうすればよいか。

■茲に日蓮上人あり、法華經を行じて我等を導く、法華經の行者は戀の手本であります、事の一念三千と申すは、戀が叶つて本佛を見出し、本佛と共に住する狀態であります、我等は日蓮上人の如くする覺悟を有するならば、實に前途多望であると信ずる。

■日蓮上人が釋尊を戀慕なさることは非常なものであつて、どうしても昨今の御契りとは思へない、五百塵點劫のその昔、佛の御弟子となり教化を受けられ、已來片時も佛を忘れずまします大菩薩に相違なからうと思う、其の渴仰が事の一念三千の喜びとなつて、風救のまゝ正直に世間に働く所の偉大なる日蓮上人であります。

■特に身延御退隱後の御優しい御教訓、尙ほ又晩年には御健康も勝れなさらないのに御藥もなし、此の有樣は佛が昔しの壽量品を、今に移して御示しになるのではないかと思へば涙抑へ難い、嗚呼。

■どうぞ日蓮上人にあやかりまして、少しでも早く本佛まで思ひが届く身に成りたいと切に考へます、此れ我等の優しき心である、此れ私の小さき信仰であります。

淺薄なる講演が、少しなりとも思恩教林の爲め、利益することが有れば、大いに仕合であります。

○私の新年感

春の初の御悅び、木に花のさくが如く山に草の生出るが如しと、我も人も悅び入りて候

（外五上野御返事）

新年の御悅びは自他共に同慶の至りに存じますが、さて新年を祝いまする意義に就ては、お互に同じからざる處があろうと思ひます、私は今茲に自分の新年に對する感想を御噺致さうと思ふ、凡て宇宙の事柄は何ものにもせよ、總て循環の理法に則つて居るものである、歷史は繰返すと云ふが、豈但歷史のみならんやで小は吾人日常の生活より、大は天體の運行に至るまで、日々夜々年々歲々同じ事を繰返しつゝあるのであるが、その繰返す中に進歩しつゝあることを認めねばならぬ、樹木は春至れば葉生じ花咲き葉成る、秋至れば落葉して枯木と同樣の狀態に還るが、年々繰返す間に一寸二寸と（延びて段々と生長する、同樣に吾人も年々歲々同じ事を繰返す間に前途に光明を認めて進んで行かねばならぬ、茲に新年の目出度さを見出すことが出來る、若も前途に何等の光明を認め得ずんば、新年は目出度からざるものであろう、私は私自身の前途に於て、益々幸福の多大なる前途の光明を認むるが故に、年と共に光を信じ、現當二世の所願圓滿を期して、明に近かづきつゝありと思ふて、新年の祝すべき意義甚大なりと思ふて居るのであります、然し斯る意義に新年を祝することは、世間普通の事であるが、更に私は日蓮主義信仰の立場より特に新年に對する感想の深きを覺ゆるものであります新年は春と云ひながら、小寒大寒目前に控へて春陽來復の時候とはならぬ、萬目荒蕪、野に山に、草も木も落葉枯死して、慘憺たる光景であるが、この情なき狀態は表面に現はれた處で、其内面に於ては、彼等草木は、寒威に抵抗し霜雪の苦難を耐へつゝ、一陽來復の曉に於て大發展を試むべく、其用意怠りなきものである、大活動の餘力を貯へんとして、盛に營養分を吸收することに努めて居るのであるが、此準備行動の爲めには新年嚴寒の時機を最も適當とする、私共の信仰に於て、本佛釋尊を大慈悲力と私共の信念力とが、感應道交する狀態が、新年に於ける草木のそれと同じであると思ふ天台大師感應の義を釋して、感は機（衆生）に屬す、微發の義、應は聖（佛陀）に屬す、赴應の義なり（意取）とあるが、衆生の信念内に微かに動きて將に發せんとして居る處が即ち感である、此有樣は、草木春陽の候に向つて將に發せんとして居る新年

井村白咸

家庭法話

の時と同じ有様である、佛は鑑機三昧に住じて衆生の信念微かに發せんとするの有様を知召して之に赴き應ぜらるゝので あるが、我等衆生は此信念微發の時機に於て、煩惱の寒威と戰ひ、誘惑の風雪を凌ぎつゝ、修養の大努力をせねばならぬ斯様にして、一陽來復臨終の時至らば、妙覺の山に走り登りて四方を見れば法界は寂光土にして、天より四種の花ふり、虛空に音樂聞へ、諸佛菩薩は普常樂我淨の風にそよめき給ふ、其數の中に列り得ることが出來るのである、故に新年は我等に信仰の修養を勸むる大教訓を爲しつゝありと思ふのである。此は私の信仰より觀た新年感である、前に掲げた聖語に導かれたのであります。

○畠山君に答ふ

高岡市誌友畠山友次郎君より、妙法蓮華經を因果の二法と解釋せらるゝことは誤なきやとの質問に接したれば左に答ふ。

妙法蓮華經の體は天台大師は十界十如權實の法と解せられ、日蓮聖人は當體義抄の中に『十界の依正即妙法蓮華經の當體也』と御示しに相成つて居る、十界の依正と言ひ十界十如權實の法と言ふは、言を換へれば、宇宙全體と云ふことである、宇宙全體の中には因法果法如何なるものでも含蓄せぬものはない、故に妙法を因果の二法なりと云ふことは誤つて居るとは言へぬ、此を圖示すれば左の如くなるであらう。

妙法卽宇宙＜佛界／地獄乃至菩薩＞

十界の各に十如の因果あるが故に權因權果實法の佛界に本迹ある故に迹因迹果本因本果の差別が出來るのである、然しながら斯様に妙法蓮華經を宇宙の全體と解釋することは眞理として妙法を見、觀念の對境としての妙法としては適當であるけれども、我等日蓮主義の信仰者より見れば、如上の解釋は何等の價値なしと言ふを妨げない、何故となれば、我々の信ずる妙法蓮華經は我々を救濟すべき力用を有つて居らねばならぬ、我等凡夫の當體か妙法の全體なりと知つても、我等は何等益する所はない、我等の向上發展には何等の力となつて顯はれて來ぬ故に、我等の信ずる妙法蓮華經は眞理、智慧、慈悲、功德、力用の凡てを結晶して出來た妙法蓮華經でなければならぬ、觀心本尊抄に『釋尊の因行果德の二法は咸く妙法蓮華經の五字に具足す、我等此五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を讓り與へ給ふ』と仰せられた妙法蓮華經でなければならぬ、此御書に依れば、妙法蓮華經に含む因果の二法は因行果德の大功德聚である、功德の結晶體である、斯る妙法を信ずる故に我等は妙法蓮華經に救はるのである、信じ甲斐のある妙法蓮華經と言はるゝのである、斯る次第なるが故に妙法蓮華經を因法（九界）果法（佛界）の當體なりと解釋するは誤てはないが我等は取らぬ我等の信ずる妙法は、今一歩進んだ因行果法の功德として之を解釋致します、委しくは天晴會講演錄第參輯の拙講『南無妙法蓮華經』を讀んで頂きたい。

二三、談理の差配

中昔伊豆の山中に學匠ありけり、弟子も下僕も他行の時鹽賣一人來り、鹽や召し候へと云ふ、鹽は大切のもの買はなんと思ひ一俵幾何ぞと問へば、唯御計ひにてよろし召れ候へと云ふ、上品の絹一匹に替へてんやと云へば、子細に及び候はずと悅びて替て去りぬ。弟子下人歸り來りて此事を聞き、そは鹽賣に誑惑せられ給へり、上絹一匹にては鹽十俵買ひ得べきものをと云ふ、さては然かと頭を搔く。次の日薪賣薪召せとて馬につけて來る、おろさせて昨日貴邊に誑惑せられたり、其補償に此薪悉皆取るよと罵る、さることと候はずと分疏すれども聞かず、弟子共そは師の御房の僻事にて候、昨日のは鹽賣是は薪賣なりと云へば、御房達は非學匠にて子細も知らぬさかしらする者哉、鹽賣は鹽賣薪賣、薪賣とは別敎の心なり圓敎の心には薪賣即鹽賣鹽賣即薪賣なりと叱りければ、弟子共呆れて薪賣を物蔭に呼價をとらせて歸しけりとぞ。（沙石集）

惚けた談話の樣なれども、敎判の踏み違へした圓融學者には、昔も今も得てして斯る滑稽談の種を蒔くもの多かり、熱心はさる事ながら讀みし書籍に因はれて一向一如理談の鳥籠桶に陷り、味噌と糞との相違點をさへ見はけ難なの難病に罹る淺猿しさに、豈唯々學匠とのみ云はんや、在家の衆の一廉物識り顏に云はる事を聞けば、題目の念佛のと目に圭角立てゝ讐敵の末ではあるまいし、大正の大御代に喧嘩腰丈は止したらどうだ、法華宗徒の念佛無間もちと藥が强すぎれば、念佛行者の法華が佛になれば犬の糞が肥料になると罵しるのも考へ物なり、所詮は一佛所說の言敎人各々の好む處に任せたら可ではないかと。如何にも捌けたる申分の樣にて、言理あるが如くなれど實は大に然らず、抑も斯る者輩は佛も法も何も知らぬ小賢し氣なる阿呆なり、きいたロの批判を試むる前に、ちと別敎と圓敎、雜圓と純圓の相違點、さては開顯義門と、體內の權實とか、名師に就て聖敎を涉獵り、耳を富まし眼を明かにしての後にし給へと申し聞せ置く。題目彌陀名號勝劣抄の一節に斯うある「念佛と法華とは一體の物也、されば法華經を讀むこそ念佛を申すよ、念佛申すこそ法華經を讀むにて侍れと思ふ事に候也と、斯の如く仰せらるゝ人々聖道門の中に數々御座しますと聞ゆ、隨て此義を存じて日蓮並に念佛者を嗚呼がましげに思へる也、先づ日蓮が是程の事を知らぬと思へるは果敢なし」と此問題に適切の判例ならずや、重て云ふ圓敎無礙の妙談は素人には勿論餘程の學匠でも兎角は痼氣筋の惡平

等に踏み入り易きもの、差別と平等心すべき大切の談道と知らざるべからず。

聖語、九十六種の外道は佛慧比丘の威儀より起り、日本國の謗法は爾前の圓と法華の圓と一つと云ふ義の盛んなりしより始まれり。（十章鈔）

二四、魚屋八兵衛

維新の當初京都に志士會合して國事を談じ、所有艱難を嘗て、王政復吉の大業を企畫せし當時席上必ず魚屋八兵衛の姿を見る、八兵衛素より微賤の一商賈のみ而も各藩勤王の志士と伍す無上の幸榮なり、寡言素朴ははら志士の僕使となり各般の用を便ず、而も義に敏く胸中燃るが如き情熱あり。幕府の壓迫愈々急に諸種の困厄襲ひ來る毎に、流石の志士も靑息吐息嗚呼之を奈何と嗟嘆の聲を漏らす、其都度八兵衛平然として進んで曰く「失禮ながら夫は皆樣の熱心が足らぬと申すものと。此一語毎に屈托せる志士の心靈に鞭ちて、千離萬艱突破進擊終に天下の大勢を動かすに至りしなり、されば松陰先生地を卜して聖堂以上の大學校を建て以て志士を養成せんと企圖せし時の檄に首尾よく校舍建設の曉は、何よりも第一に八兵衛の神牌を奉安せんと。（松陰遺稿）

一切は志、念ほど尊ときものなし、位の高下身分の尊卑は道の前には何かあらん。赤穗義士の事實に見るも、國老大石良雄と足輕寺岡平右衛門と身分は雲泥に功勞に大小の相違こそあれ、盡忠の至誠に何の軒輊をか論ずべけけん。長老辨阿闍梨昭公と僮僕熊王丸と事に從ふ方面は異なるも、聖日蓮の慈眼よりは共に可憐の佛子續種護法の聖者として同一に視そなはせしなり。況や大僧正と驅烏の沙彌と位階異なり長幼序あるも、護法の道念如何によりて佛祖御照覽の御前には、或は其座席を顚倒するやも知れず、さるを世は競ふて人爵に戀々し、鈍くも源頼政の亞流を學ぶもの多し、君子其位に素して行ふことかは、道念微かに功勞尠なく而も因緣阿附して、より以上に自己の位置をのみ高めんす、互いに主伴となりて佛事を光顯せんとの聖き心根は夢にだも見た事無からん。鳥呼如今教團の中一個の魚屋八兵衛なき乎、足輕平右衛門なき乎、僮僕熊王丸なき乎。

聖語、總じて之より具して至らん人々には、よりて法門御聽聞有るべし、互ひに師弟とならんか。（辨殿御消息）

善日麿重忠に伴はれ清澄山に上り給ふ　聖祖傳畫研究畫家　遠阪精華君筆

死の問題と其解決

森下馨

（一）死の問題

新年は冥土の旅の一里塚として悲觀に解する人も少くない、そは新年を祝する心よりも死に近づく不安の叫びが衷心高いのも事實であるからである、人間の諸有活動あらゆる所得は死を以て終止消滅する、此の恐しい痛切な大事實に對し不安を抱くは實に當然である、若し未だ死に對して何等考へた事のない人があるならば麼は眞面目に人生を省たことのない人で恐らく醉生夢死の人であらう、自己の價値を尋ね存在の意義を求むる人にして死の問題を考察し死の問題より强いヒントを得ない人はない、死の問題は實に人間一生の修身處世の方心を定むる基礎である。

（二）多くの現代人の死に對する觀念

然り而て現代人の此の死に對する考へ方は如何と見るに、頗る不安的、悲觀的、自棄的である、そは所謂物質中心の考へ方で、人間なるものは物質が有機的組織を帶びた一肉塊に過ぎぬ、生命と云ひ靈と云ふも唯物質の作用に外ならぬ、されば死して肉體が個々の元素に還元離散すると同時に靈そのものは滅無に歸し自己なるものは最早永劫消滅すると云ふものである、如何にも條理闡明な說で理解し易く且不滅の眞理の樣にも見える。

されば山なす財寶も高い地位名譽も妻子骨肉の愛着も亦永劫沒交渉で人間の諸有努力は唯五十年七十年に限り何一つ永劫の所得はない、而も其五十年七十年の壽命も無限の時間の中に一刹那で眞に電光朝露の如きものである。

（三）其原因と結果

こうした思想を以て人生の前途を考へて見るならば實に荒寥寂寞一點の光明も溫味もない無價値な運命である、悲觀に陷るのも自棄になるのも無理はない、現代人が頗個人的になつて道義の觀念が薄れたのも、刹那の享樂に執著して高い理想を持ち得ないのも、權利を叫び弱者に對して殘忍になつたのも皆此の死に對する考へ方から根ざし來つて居るのである、死に對する考が前述の通りだから信仰などは生れない、信仰がないから人間に表裡があつて信用が出來ぬ、倫理も德義も只表面だけ口先丈けで實行が伴はぬ、敎育はあつても正しい性格高い人格は養はれない、從つて一身の素行修らず家庭は常に殺風景で波瀾の絕へ間なく生涯眞の人生の幸福を味ふこと出來ず遂に一身一家の破滅を以て終る。

（四）日本國體と惡傾向の宗敎

斯う云ふ考が修身處世の正しい基礎を破壞し文明の進步を妨げ人生を害することは前述の如くであるが、吾人は更に大なる恐を以て此の思想に注意を拂ふものである、即ち吾人の天職として奉じ其最高目的とする我日本國體の理想を實現せんとする上に由々敷大關係を及ぼす事を思ふが故なり、死に對する此の考へ方は進んで宇宙森羅萬象の神玄不測なる現象をも單に機械的の組織が原因結果の理法に由て動作する必要の現象で數理的原則に依て說明し盡さるゝものとするから、宇宙を支配する神靈の威嚴も愛護も認めない、故に何等の恩惠も義務も感じない、否全く神靈の存在を認めないのである、だから天地間に怖いものは只自己の不利益あるのみ、又其目的とする所も自己の自由と快樂の外に出てない、犧牲の觀念などは無智な奴隸の考だと輕蔑して居る斯る思想の爲に尊い日本の國體觀念が其根柢を失はんとしつゝあるは多く說明を

要する迄もない、從て國民の誇とする大和魂も軍人精神も同じ運命の下に其根柢を覆し去らるゝは自明の理て而も是が爭はれぬ事實の傾向だから、國家の前途に思を馳する者の竦然として痛嘆せざるを得ない處てある、吾人は日本軍隊がかゝる思想を抱ける青年を以て組織されたらん當時の日本國家を想像して戰慄せざるを得ないのてある、殊に今や世界の大勢に臨みて相當の國難をも豫期しなければならず上下一致の大覺悟を要する時機に際會して居るのだから特に注意すべきものなるを思はねばならぬ。

（五）惡傾向の矯正方法如何

而も此物質中心の考へ、個人中心の考へ、無神無靈の考へは、今後の日本の勢力たるべき相當教育ある青年の心の奥深く喰入つて確き根據をなして居るから是を矯正し救濟するは中々容易てない、他の手段を以てしては到底效果は擧るまい社會制度を理解させることや自治の精神を高める事などは末て是非とも高い堅實な信仰に入らしむるより外はないが夫が實に容易てない、感情宗教や直覺宗教を以て忠孝道德を巧に說ひた處て彼等は容易に耳を藉さない却て反感の度を高めしめ侮辱を强めるに過ぎぬ、どうしても宇宙觀から說き起して根本的に彼等の誤を正し死に對しても的確な安心を與ふべき高い宗教教理を闡示提給しなければ駄目てある。

（六）基督教か阿彌陀宗か

然るに現在世界宗教の教理を檢するに現代人の理智の要求を滿し是をして歸依信伏せしむべき素質を缺けるもの多く、且一の宇宙一の人生に對する說明解決が神儒佛耶相矛盾せる事これ人をして疑惑を起さしめ不安不信に陷らしむる第一着歩なり、一一條理に合せざれば信ずる能はざる現代人をしてこゝに至らしめたる亦故なきにあらず、近時此の疑惑を除かんとし基督は天の父を奉じて世界の宗教を統一せんとし、佛教は阿彌陀佛を以て各宗の歸一を企つ、其擧や甚だ可、其教說や高遠なり、然れども其天の父と云ひ彌陀と云ふも共に自然界の理法に名けたる名詞のみ擬人したる名のみ、宇宙の機械的組織にして其現象を因果必然の結果と見る者の前に果て幾干の權威ありや、說は高遠なりと雖未だ科學に克つ能はざるなり。

（七）法華經宗なる哉

あゝ宗教は遂に科學の前に伏せざるべからざるか、理智の上には神靈の存在も信仰も跡を斷つべきか、是れ世界、人生の大問題なり、吾人は此の問題を解決し、此の思潮を矯正救濟するは佛教々理の最奥精華たる法華經の教義に依るの外なきものと確信するものなり。

法華經の教義は現代人が不拔のものと確信して居る科學と矛盾せざるのみならず、是を根據として進み更に夫れ以上の眞理を闡示し且眞理の應化したる眞の人格的神靈を認めしめ以て宇宙同歸の信仰對象を光顯し、世界萬象をして信仰に安住せしめ、併て日本皇宗の神威を更に光揚し大和魂の根柢に不拔の力を與ふるものなり、現代思想病の寶藥として法華經を未信の人に勸めんとす。

老ひゆくをなにかなけかむ世をかへて
生れん道の歩みなりせは

（完）

●一統和歌俳句集に就てお答

●某々氏等よりの御尋に對して

（一）和歌俳句同集に致しまするつもりです

（二）和歌は更に選者の再校を經べく御承諾を得て居ます

（三）發行しても非賣品です

（四）十月末迄に三十人に滿たぬときは中止します贊成者は至急前號廣告を見て御申込を乞ふ

窪田鐵橋君の『句攝受』を讀みて

英忍水

（一）序言

▼**鐵橋君**から『句攝受』といふのが來ました。昨年九月の私の『句折伏』に現れた孤松子と私との隔意見を併せ評せられたもので、若し孤松兄の次の拾月の應答がなかつたなら其全文を掲載してもよろしいが、今日では如何と存じます、失敬ながら原稿は御預り致します。但し少し意味の行違ひの點だけ貰文を掲げて辨じてなきます。

▼**其前**　に一寸申して居きたいのは十月號の孤松兄の應答ですが、あの論には大概私も同感と云つてよいのです。元來私の九月の『句折伏』は孤松兄の書簡の氣焰に對すると云ふ上から多少奪つた點（所謂佛教の奥奪の二法の奪）、或は言を强めたところがあつて、其の節も『少しは別に一貫した俳論を取持致すつもりだが』云々と其だ出すぎた事ながら申したやうの次第にて、あの『句折伏』が私の俳論の全體、又は代表したものではない事を御承知ねがつておきます。

（二）更に孤松子のを讀みかへす

▲念の爲めですが、孤松兄の應答中其の骨子たるものを抜きまして私の同意する次第を披露しておきます。

△孤松子曰く『人に依りては新奇を弄ひ、濫りに晦渋の字句を列ねて却つて無味乾燥に陷らせるのを多々見受くるのてある、これらは現代俳調の通弊ではなかろうかと思われる』私も同感です。

△孤松子曰く『近代の俳句を、註解づきても尙分りかねる雜句、字書と頻引でも讀み難き凡句に數々出合する事があるが、是ては平民文學の特質を失ひ』も同感です。

△孤松子曰く『何等か心琴の響を最も簡易なる詩型に寫したのが俳句たるものであらうと信じて疑はぬので私は之を平民的に取扱ふのである』詩型的とか平民的とかいふ語が辯にも見へるが善意に解すれば、客觀的に受けたものが主觀的に響き、而して軟かに輕く無邪に外に發するものを發句とするといふ意であらうから、之も同感です。

私は　九月の『句折伏』では當面から孤松兄のを攻擊的態度に出たのですが孤松兄の十月の論は之れに應報するといふよりは、新に訂整し、辨解し、又は別に現代の通有性の俳辯を一呵し、併せて自己懷抱の俳句論を述べたものと見て良い位と思ひます、而してそれには私も以上の如き共鳴する處が多いのです。私の九月の『句折伏』が孤松兄の十月の論に依て何等影響して居る點は發見しませんが、其の整備されたる應答に依つて私の句折伏の論が無用になつたことを喜びます。

△尤も孤松兄の『單に新奇が俳句の生命だと君が斷定を下す其處に君と私との見地に大間隔ができるのてある』とあるけれども、孤松兄が眞に私の『新』と云ふ精神を掬み分けてくれたなら無論私と同感であらねばならぬ筈てある、何となれば俳句が、句材に、句調に、句面に、句の心に、必ず新たらんと力むることは一貫した俳句の精神で、換言すれば俳句の生命であらねばならぬ、其の何れもが古くてよいといふ筈はない、之は私の所謂『新』の意味が充分了解されておらぬからであらうと思ひます。

△次に孤松兄の『現代調の如く堅苦るしき漢文字を、どうしても讀みこまねば俳句にならぬかの如き信念を以て』云々、之れは孤松兄か思ひ過ぎで、常識あるものなれば假令今日の突飛な新派の俳人と雖も恐らく道んなことを思つて居るものはないが假りに持つて居るものがあるとしたら、其の之れを間違つて居ると見る事は無論私も矢張り同感てあります。

▼右の次第で九月の『句折伏』の問題は小さくへネクレて理屈を言へば癖論に陷る大きくうなづけば片づいてゐるのですから、今は只君の『句攝受』に全く其の意味を誤解されて居る分、及び議論の面白い分だけ摘出して、ついでに辯明及び批評をする次第であります。

（因に孤松兄のゴツ〳〵スラ〳〵の解譯は私の意見とは少し變だが云ふほどの事でもありませぬ。）

（三）鐵橋君の評に對する評

▲鐵橋君曰く『新奇は「唯目に見たまゝを有の儘を今の言語で今の我々の生きた言葉で、スラ〳〵といふに過ぎぬのである」といふ、其れでは感想が薄く氷を嚙んで味を知らんと望むものと評する外はない』

▲答て曰く、此の私の數語は孤松兄が私の句を讀んで『無理に新奇を衒ふ傾きがある』と云ふに對して、『それでも私は新奇を衒ふつもりはない、唯眼に見たまゝを今の我々の言葉でスラ〳〵と云つたつもりですが、それが君には其んなに讀まれるのはおかしい』と云ふやうな意味に過ぎないのです。それは九月號十二頁二段目一行孤松曰くから十五行迄更に御讀み直しをねがいます『新奇』といふ事は孤松兄が私に對して云ふたことで、それに私が私の吟狀を應へたのであつて、此の場合の新奇とか云ふものに、私が定義めいたことを云ふ必要がないとしたなら君が此の文字を前後なく揭出して評さるゝのは如何てしやうか。

▼次に孤松兄と私とが『好かぬ』と二人ながら云つたのを御叱りですが、私の『好かぬ句』といふ意味は矢つぱり好かぬ句の事、卽ち面白く感ぜぬ心地よく

感ぜぬ愉快に感ぜぬ句を指したのである、つまり立場の違つたところから吐かれて居る句に對する評語です、孤松君も私と多分同感だらうと思ひます。愚れば君の評の如く自己本位とかいふものかも知らない、しかし之か爲に君が謂ふ『俳趣味を沒却したもの』と云はれるのは如何でせうか、

（四）限定數論に對して

▼次に之れは君の一識見として拜讀した論ですから左に全文をのせませう。

『近來の新派とかの句には往々限定したる數を以て得志とするのは何んな意味であるか、十箇村、梅三鉢、牛五頭、道三里等の其れである。「鐵洗ふ前を蛍の二つ三つ」の如く、ある未定數を現はしてこそ餘情の總々たるのであるのは無からうか、所謂新派ならば長堤百里、數十箇村的に現はして貰ひたい』

▲お答します、鐵橋君の說は一應御尤ですが、限定數だから餘情が無いとは受取れませぬ、一ッ、又は二ッ、又は百と限定して始めて餘情の曳く場合もあり、又二つ三つと未定數で餘情に深い場合もあり、一概に云へまいと思ひます、例せば蕪村の句を見るに

春や老木の柿を五六升
線香やますほのすゝき二三本

二つ三つよき名望まるすまひ取

この句は未定數で餘情がある、同じ蕪村の句に

朝顏や一輪深き瀧のいろ
ぽき〳〵と二タ本手折る黃菊哉
小春風眞帆も七合五勺かな
時雨るやとある所に鷺一つ
木枯や炭賣一人わたし舟
石公へ五百目もとす年のくれ
冬籠母屋へ十歩の懷傳ひ
慮買ふて且うれしさよ炭五俵
鉢洗ふ水のうねりや鴨一羽
水鳥枯木の中に鶯一挺
水鳥や提灯一つ城を出る

これ等は定限して其處に甘味を覺える同じく句に

寒月や枯木の中の竹三竿

これは深草元政上人の嘉に謫でた感想で必ず定限數の約束を生じて居る。同じく句に

二村に貧屋一軒冬こたち
三徑の十歩に蘆て夢の花

限定數に又限定數を配りて面白い。又同しく句に

山蔦一二の鉢ののほり哉

これは未定字でも實は一と二との別々の定限字である。又同じく句に

霜百里舟中に我月を領す
花火見えて淋かましき家百戸

これは定限數であるが其の心は未定限數で例字である。此の類は前掲の句にもあるが蕪村の句に考へ見ても、必ずしも定限數が新派の傾で、而して餘情のないものとは云へますまい

▼次に鐵橋君は私が實句といつたのを『實感と解して見ん』としてありますがあれは『理屈より句』と云ふ意味なのです、例せば『美人々々といつてもそれには度がわかぬ實物たる本人を見ねば』といふやうな意味です。

（六）俳句の滋味此にあり

▼次に鐵橋君は私の選び出した碧梧桐の

二抱三抱の櫻ばかりなり

を『恁んなに大きな櫻ばかりの所が何處にあるか』と前掲して『滑稽』とまで極評してありますが、之は私はあなたとは意見を異にします。先ず株揃の櫻の林？　本見る、假に上野としますか、『イヤ大きな櫻ばかりだなあ』と小さな木があつても眼にとまらず、感歎して居るありさま、伴の人に『二抱も三抱もある櫻ばかりぢやないか』と魂消て居るありさまが見るやうであります。俳句が複雜な思想の上に立つて而も簡單な句を作る事を容るゝとしましたら此の句の表面の二抱三抱の一面の表顯と、及び其裏に隱れたる多くの餘影餘情を認めてやるのが俳句の俳句たるところの味に接したものと思います。これを容れて透視し聯想し觀察せなかつたなら俳句の味は淺くなると思います。好きとか嫌とか云つても碧梧桐は流石に名句があると私は感心します。

（七）實物の違ひと稚氣噴飯

▲次に『同じスラ〳〵でも實物が違ふ』と云ふ事が不解の由ですが、這は『文字一にして義異るの類』です、同じからい味といつても唐がらしとわさびと味の實が違ふと云ふ意味、卽ち表面一で內容の相違の事と思つて下さい。

▼次に私が孤松子に向ひ例句を示し『孤松兄以て如何で御座る』と云つたに對し、鐵橋君は思はず其の稚氣に噴飯するのである』と云はれたのには汗顏の至です、しかし、第三者の人の立場から此の一節のみで噴飯せらるるのは少し私は苦しく感じます、私の全體の文字が其處まで進んだときに、一寸位雅氣を帶び滑稽を帶びて親友ぶりを發揮してをいてもよい理由は、孤松兄から最初『君の名吟落んで拜見な仕りたが、私には分り申さず』こんな書き出しで、さて評に入りては『但し無理に新奇を衒ふ傾きあるにあらずやと考へらる、あれだけの事を歌ふのに七六數言はずとも隨分言はれぬ事もあるまいと思ふ』これが親友でなかつたなら、隨分無禮な口ぶりである、況んやこれをまともに（眞面目で）讀んだなら思ひ切つた傲心の言葉と云はねばなりますまい、しかし私は偖ては孤松兄も滑稽的に此道にある例の鼻にぎり流を示すのだな、ヨシ〳〵それでは失敬ながら一本御免を蒙らうと一寸チョッカイを差出した次第で、罪のない上に於て實言葉に貫言葉『いかゞで御座る』の一言ぐらいは言つてをかぬと俳評が疎くるしくなりすぎて、風流とは云へ親しい中が……と思つたまでの事であります。

（八）結言

▲終りに茲みて、あなたが私の『老僧經誦し給ふ客蚊の殺生哉』『蟻たかりし僧に蟬洗ひけり』があなたの理想上合致して居る名吟だといはれたのを喜んで感謝しておきます。又あなたの『現代に應じて徹底したる俳論又は俳句を忽む』等の段に私の共鳴する點が多々ある事を申上げてをきます。又『句摘受』は大體に於て、公平の立場に立つて批評せられんと努められた點をも喜んでおきます。（終）

統一俳句課題發表

同人選評

○芹

芹洗ふ水に小春の光り哉　長崎　白哉
芹摘むや田舍小町が腕太き　同　村
小さき手に母よと芹の一握　淺草　青
献芹の微臣野に滿てり御代の春　同
青々と芹の薫りて雨けふる　越前　森仙
千代の春祝ふて芹の青み草　同　淨
洗ふたる芹を三ッ子の運びけり　千葉　白水
芹摘や褌かへて貰ひ風呂　同　惟泡
芹芽立つ流に遊ぶ小鯊哉　青森　愚狂子
米汁を流す小溝や芹盛る　同　笑翁
娘等が摘んだ根芹や酒使　白石　芳子女
母子二人芹一手籠小半日　淺草　香雄留
消え殘る雪其儘に摘む根芹哉　丹波　安住
芹に手の屆けば濡るゝ袂哉

○佳　句

芹摘やあぜに無ざんの赤草履　周子女

評　泥に重りし小き草履は捨られたり、母にか姉にか背おはれて歸りけん初春の野の光景、情のある句なり。

水鳥の逃げ隱れけり深芹田　日本橋　鐵橋

評　水の音は石投げしにや、其處には餓鬼將軍の立姿見ゆ。

海拔五千尺の麓芹の小川哉　名古屋　麗陽

評　思ひ切つた意匠を採る。

春寒や芹を摘む娘に歌もなき　成東　堀江

評　春とはいへ未だ風つめたくして只母の依囑？に背かざらんとする誠意に時のうつれるなり同情ある句なり。

白根まゝに神の御前や芹一把　慶山

評　あま楽、から楽の外に、香り楽は神饌の禮なり。

芹摘や一水遠く町に入る　長崎　天岳

評　町端の橋を渡りて其川岸より思はず一里は來りけん、振りかへり見し彌悠長ならんとする初春の景色なり。

雪解けて岸に芽生の芹青む　越前　龍雲

評　小川に添へる田舍路を傳ふ人の一人二人を見る樣をなす、其處に繁に疎に根芹生える樣をうつす、野趣に同化の深き想あるものならでは描へられまじき材なり。

捨芹に家鴨の濁す流れかな　千葉　雀子

評　山には遠き里家の横を流るゝ餘り清からぬ小川の樣、土小橋の下の洗濯石なども見らる、靈ならはよろしく人の配置もあるべし。

芹引けば小き田螺のお伴哉　評者

○紙鳶

飛行機を紙鳶の尾につる小ハイカラ攝磨　香雄留
關取の國の土產や東マ凧　淺草　慶山
飛行機を紙鳶ちやと村の評議哉　白石　笑翁
切たぞといふ間に凧の丘幾つ　千葉　龍此
奴紙鳶村長殿が見て御座る　長崎　白哉

評　餓鬼大將君の怨恨はさる事ながら左樣思へば繪武者さへ斯く見ゆめり。

紙鳶揚る兒や大將の器もあらん　伯耆　孤松子
長兵衛殿か一人息子のうなり凧　麗陽
春寒や主にわかれし懸り凧　周子女
俵の上餓鬼大將やいかのぼり　同
揚凧に金の力の人出かな　上總　白水

○佳　句

雨の日は釘にうらめし繪鳶哉　天岳

評　餓鬼大將君の怨恨はさる事ながら左樣思へば繪武者さへ斯く見ゆめり。

糸は肩に凧滑走や馳けゆく子　芳子女

評　句相の意匠を採る。

大紙鳶も水田に落て骨ばかり　愚狂子

評　風せるが如くなり。

病兒室にあり紙凧のうなり哉　青村

評　子の心と親の心をくましむ、寂たる室の外に此の聲のみ幽に傳へ來る。

凧生駒は根より暮れんとす　仁衛屈

評　母のさぞ待はびぬらんに、歸ることを忘れた兒等一人二人。此の句眞觀の景に叙情を含めたり。

流れ緩に紙鳶の眠れる江尻哉　惟泡

評　評をすれば百行でもつきぬ含蓄の豐富な句なり評者の好な句なり。

鬼瓦に奴の凧の最後かな　評者

●石井雀子君でしたと思ふ、〆切後俳句が來ました、その中に、百疊敷の方丈に芹の香が滿つるといふやうな氣分の佳句がありましたが、私の不注意で其葉書を失ひました、今一度御投吟を願ひます。

●次號課題『桃』『初霜』締切二十日

宛　東京市小石川白山前町統一編輯所

■句相撲

相方ともよく見合はして、ハッケヨイ
▲諸君此の相撲の強弱を投書あらんことを乞ふ

○あがれ紙鳶君が天地の大いなる　1 不二子
虚空に邊際を得じと凧　2 鐵橋

○數十の凧竝び行く春の空　3 龍雲
奴凧列を正してあがりけり　4 仁鳳

○禮帽をはね飛ばしけり紙凧の絲　5 青村
凧絲の島田に一寸もつれけり　6 白水

○雷柱に懸りしたこの憐れさよ　7 玄山
雷柱に武者繪の凧やいかめしゝ　8 龍北

○絲きれて枯木にかゝる鳶の骨　9 玄山
今日買ひし紙鳶のかゝりし枯柳　10 秋月

○其夜から鳥は寢に來ず掛り凧　11 安住
切凧の梅にかゝりて揚りけり　12 鵲園

○幼子の竹に縛りし奴紙鳶　13 秋月
紙鳶に子をつらせて母のお針哉　14 香雄留

○驚いて蹈迯げ出す田芹かな　15 青村
芹つむや魚驚いて迯げにけり　16 龍雲

○守に凧もたせて母の乳ふさ哉
乳房吸ふ兒の持主やいかのぼり　17 周子女
18 鵲園

▲袖浦會第十二回俳句

蕉雫庵宗匠選

○秀逸

世を捨てし老も惠方へ詣て哉　眞砂
女房の眉の根靑し松の内　龍老
餘念なく脊に眠る子や若菜摘　遊雅
初鷄の聲いさましく謠ひけり　莊夢
初鷄に豐葦原は明けにけり　眞砂
盃を手にせぬ日なし松の内　眞砂
初空や民のかまどの數幾つ　莊夢
野は雪の深き咄や若菜賣　眞砂
氣も清し若菜摘行乙女かな　雀子
　　溪水

○再考入印

惜まるゝ日は過ぎやすし松の内　遊雅
天地の清きながめや初み空　勉之
初空や富士白妙の朝ぼらけ　溪水
別莊は歌留多の客や松の内　勉之
初空やみとりに渡る海の上　莊夢

○甘吟十二印

初空や魑魅魍魎のあとともなし　曙
幸祈る笑貌揃ひの惠方かな　莊夢
初雞や去年と今年の夢境　勉之
初雞や塒に唄ふ四海波　摩外
殊更に清き日嬉し若菜摘　莊夢

○

合點　天勉之　地溪水　人曙

次回課題春風、苗代田、彌生、接木、百千鳥
各題二句吟〆切二月十五日　入花七仙
蕉雫庵宗匠外一名撰千葉縣濱野袖浦會宛

俳句はちす會

▲初會開規

一、來る廿三日（舊正月元日）午後四時より第一回を統一閑内に催す

一、贊成者は左の要件を御承知ありたし
（イ）廿一日までに來會の通知ありたき事
（ロ）同時刻までに必ず御來會の事
（ハ）會費拾錢御持參のこと。但し外に十錢位の食物御提出ありたき事（包みたる中に名刺御入れ封して御提出の事）

一、課題は（一）舊正月の感（隨意）
（二）春寒（各二句以内）
（但し俳句初心の人にて入門希望の人は（イ）（ロ）（ハ）の條件さへあれば課題に應じなくても御來會差支なし）

一、會の順序は左の如し
(1)題句整理（發起人中にて之を行ふ）
(2)右整理中有志の俳句に對する處感談
(3)課題互選幷に發表幷に評
(4)食事（御提出の食物を開き交換して樂み喰ふ、尤も會としては大福餅、白馬酒等を用意す）
(5)書畫合作にて開散

一申込所　淺草區清島町統一閑内『はちす會』宛

發起人　高木治地。山中慶山。鯉尾鼓城。
贊成者　中村曙。野口何處子。山根青村。
木村白蘋。山名如是。窪田鐵橋。遠阪精華。
熊井蹇城

祖師日蓮聖人御傳

▲御子供たちは大きい文字だけお讀みなさい

幼時の一

善日麿は十歳を超へなさるが、里の友達と物評ひをしたこともなく、走り狂はず、殺生を好まず、母の信心にあやかりて神を敬ひ佛を尊み、苟も親にさからふやうなこともなさらぬ。父に文讀むことを習ふて、古今の義理もおほろげながら知らるゝので、此の界隈では、珍らしい子、神童であらうと評判されるのでありました。

しかし麿は柔弱のお兒ではなかつた、父の武士なる事、母方の豪士なることを知ると共に、劍の心も馬上の委も武士の心得も斯くあるべきことを知られた、それは父母より洩れ聞きされ見聞きされたのでありました。後に乘馬を愛し、又劍をも愛て給ひしといふも或は幼少の時の習ひ心の故であらうか、或は又天性勇武の心も備はつて居たのでありませうか。

かくの次第で、心に武士の氣の取り去る事の出來ぬ父重忠殿は、どうか麿を武士に仕立、家名を再興したいといふ心もあつた、しかし夢の告を思ふても見て、心は確と決らなかつたのでありました。

寛喜元年己丑は八歳、蒙古太宗元年、二年九歳、五穀登らず。米價一石錢一貫文に定む。關白基房薨ず三年十歳。大風洪水、天下大飢、土御門上皇崩。貞永元壬辰十一歳。北條泰時式目を頒つ（貞永式目五十條是なり）、栂尾明惠寂、後堀河帝讓位。

（附言　前號遺補、嘉錄二年九月九日辰の刻、美濃國蒔田の莊には大雷降りて積ること一尺餘、又武藏金子の郷には雷交りの雨降り出で、後には大雹となり、禽獸を多く打殺したり、又鎌倉雷降る、奥州には小礫降る、此故に改元す。安貞二年四月鎌倉に怪聲の鳥數千飛び群る。）

（四）出家

登山

安房國に千光山清澄寺といふ台密兼學の山寺があり（寶龜二年の開基、當寺は天台宗、後に眞言宗ともいふ）住持は善道といはゝる老師、かねて重忠とは懇意にあり、善日麿の容貌雄美、骨格逞しくて、性質正しくいかにも賢げなるを見て、其出家たるべく慫慂てみると、麿の心には豫て其望みあり、重忠夫婦も意を決し、天福元年五月十二日登山あり、此時麿は十二歳でありました。

天福元年癸亥十二月八日　九三年
八十七代四條天皇即位、紀元一八

藥王麿

清澄寺に登り藥王麿と改名、之れより道善の御坊深くいたはり、手習の事を習ひ給ふに、筆法書體も既に修練の人のやう。讀書は小學を始め論語などに至るもの讀み方二遍三遍にして能く暗誦じらるゝ一を聞て萬を知るとはげに藥王麿の事なりとて見るにつけ聞くにつけ舌を卷かぬはないとの事でありました。

清澄寺より南一里餘、二間寺といふに、道義といふ、道善坊俗緣の兄があつた、一日藥王麿の非凡なるを見て、東夷東條かたうみの藻を苅る賤が家に何とて斯る愛でたき兒の出生したるぞ、斯兒將來必ず我家風を輝かすべきぞと驚歎したといふ事である。

●十二月統一閣

前號洩れたる分▲十日、高木、松本、松尾の三氏、信念啓發の演劇、本多師十七日、木村氏の外に日蓮主義と十二月野口日主、前題の其二本多日生の開師出席之れにて五年度は結講とせり。

●統一閣講師會

一月七日午後五時より統一閣樓上に於て講師を招待し清饗を俱にして將來の布教上に付打合をなし、尙京都法華會に應援として時々講師を派遣することゝし、其第一着として本月關田日城師を勞することゝし解散したり。

●構妙會初會

七日午後一時より構妙會初會を開く

守護國界主陀尼經講師本多日生猊下

右は大藏經要義の一部にして卽ち法華經本門の大觀の下に講ぜらるゝものにして都合數回を重ねて講了さるべし、小原正恒少將、松本有信少將、岩野直英大監、佐藤鍛太郎中將、矢野茂、小笠原丁氏等數十名にして盛會なりき。尙熱心家にして本講座に列せられんと、せらるゝ人は岩野幹事まで申込まるべしと。

●顯本學林同窓會

七日午前雜司ヶ谷大學林內に於て開催林長井村日威僧正、關田日城僧正、池澤日長僧都其他の來賓ありて盛會なりき。

●身讀會初會

猪又、小林、東畑、伊藤、岩井、宮澤、田川、內田等の諸氏に依つて設立せられ居れる同會の初會は八日築土八幡町に於て開催、會員約三十名出席されたり、猪又氏開會の辭を述べ修法の後、松尾講師は五濁より說き出して現代の病弊を述べ新年の感と結びて信仰の歸入を懇願して座につき、それより清饗に移り、東畑、岩井、山本、宮澤等の諸氏の所感談は各自の胸底よりありの儘に吐露せられ、終つて講師の發聲にて開陛下の萬歲を三唱し、餘興として精神修養、信仰啓發に資する又は滑稽等の記しある物品の福引をなして散會

●神奈川縣

神奈川在大綱村大豆戸、本乘寺檀吉田三郎兵衛氏宅の月並題目講修行には住職前田圓整師病氣に付、代理として加藤圓順師通俗講話をなす、聽衆約五十法益多大、

●京都法華會

▼木內京都府知事　は熱心なる日蓮主義者にして、京都府知事として赴任以後當地の敎界刷新に努められたる結果、村雲尼公猊下を總裁に戴き、昨冬十月十五日午前十時村雲瑞龍寺門跡に於て法華會法會式を擧行せられぬ同日午後二時より京都帝國大學學生集會場に於て、文學士小林一郎、法學博士山田三良、文學博士姉崎正治の三講師の講演、夜分は三條通青年會館に於て講演、何れも聽衆千名以上にして盛會、翌十六日午後一時より總本山妙滿寺、川東本山要法寺の二箇所に於て各講師の講演、未曾有の盛會なり。

▼第二回京都法華會講演　は昨冬十一月十九日午後一時より本山頂妙寺に於て開催せり。

開會の辭　委員　西村唯妙師
社會世話と法華經　文學士羽栗賢孝師
敎の敎　布敎師金光孝碩師
當日富山市大法寺中村寬淫師來京出演盛會なり

▼第三回京都法華會講演會は十二月三日午後一時より京都帝國大學々生集會場に於て開催せり

開會の辭　委員　清水政太郎君
敎義と人格　文學士　小林一郎君
日蓮主義の主張　大僧正　本多日生師

當日は村雲尼公猊下、木內京都府知事夫人令孃同伴參列あり、同日午後六時より三條通青年會館に於て

法華經の流布　文學士　小林一郎君
國民道德と日蓮主義　大僧正　本多日生師

各山貫首其他來聽者壹千名餘盛會なり

●京都拾六本山役員會成立

金光孝碩、足立日城、西村唯妙、淵田惠綱、西脇顯道の諸師は各山執事にして、亦法華會委員なり、同師等發起者となり顯本總本山妙滿寺に會合し、十六本山執事大集會の結果、昨冬十月廿日各山役員會を組織したり、同會は毎月十六日暮早々より會合、第一回總會は本山頂妙寺、第二回本山本願寺、第三回大本山本國寺に開催、有益なる會合なりき、本會に幹事三名を設け、還擧の結果、金光孝碩、野本智寬、高橋舜旭の三師當選、諸般の事務に當られ三幹事は昨冬各山貫首訪問の結果、一月十日大本山本國寺に於て十六本山貫首並に各山役員の新年會を開きたり。

●京都の佛式婚禮

今や物質萬能の時は去り、精神的文明要求の現代は冠婚葬祭も亦た精神的儀式に依る例少からず、當市東洞院姉小路上ル水木菊三郎氏は去る十四日午後八時寺町二條妙滿寺內成就院に於て佛式寶前婚禮を擧行したり、司會者清水一乘媒介者木田金四午後十二時閉會△式順受持勸請文、自我偈新郎新婦誓約書取替し、奉白文題目、三三九度杯調誠受持文

因みに水木氏は代々淨土宗なりしが妙滿寺の日蓮主義講演と大橋武三郎氏の誘導に依り改宗して成就院の檀家となる爾來熱心なる信仰者なり

●北陸顯正會發會式

日蓮主義大演說會　十二月一日

福井市聖祖門下寺院聯合主催にて福井市妙國寺に開會聽衆三百餘名盛會、演題辯士は△宗敎本領石井寬俊△日蓮聖人國家觀水村遵辨外數名

●福井敎報

福井市顯本寺に於て宗祖聖人御會式十一月十二日演說、辯師は石井寬俊師▲十三日說敎▲十五日月見町小竹字助方に於て演說▲廿八日坂井郡蓮照寺に於て說敎

●名古屋活動敎報

十二月八日午後七時より、市內新榮町常德寺に於て、例會講演會を開催す、▲立正安國論　村田義本。朝の氣暮の氣　有田宏道。日蓮上人の大人格　國友日烈の講師の講演あり、年末且雨天なりしも熱誠なる參詣者ありき、

●福井縣敎信

▲馬和尚の來講　十二月十七日夜は南井妙正寺たて講演。發心の動機と宗敎信仰、矢野碧顯十九日　山內本行寺にて講演。軍隊敎練と宗敎心の發動　矢野碧顯、▲信徒の心得と僧侶の責任　秋葉純一

●京都

京都は萩原、金光の講師陣頭に立ちて奮鬪目ざましきものあり、妙滿寺（十二月二日）に於て護正會開催。自我偈大意本多大僧正▲本正寺婦人會開催。（十日）婦人の活動金光布敎師▲妙滿寺方丈に（同日）撰時抄講義萩原僧正▲成就院婦人會開催（十二日）如說修行抄講義清水一乘▲妙滿寺國光婦人會開催（十三日）信仰の力蔡原本山部長▲法光院婦人會開催（十六日）惡鬼入其身金光孝碩（金光布敎師は時事感ずる處ありて經文祖書を引證して大に熱辯を振れたり）▲十二月十九日午後三時本山妙滿寺に於て聖祖門下同志會例會並に忘年會開催（開會の辭明渡常置員）御書拜讀金光常置員、當日は金光、明渡、小橋三常置員は任期滿了に付改撰の結果清水松井、林の三師常置員に當撰せられたり、尙金光孝碩、淵田惠鋼、明渡惠敎の三師は本會に關係深きを以て萬場一致を以て評議員に當撰せられたり、會計井澤、幹事小橋、三好、小川諸氏當選せられたり、席嶋荻原僧正其他諸氏所感ありて盛會なり。

●大阪敎信

●顯本講々演會　十二月六日赤銅宅▲八日木の本宅▲九日青山宅、右京藤師出演、堂閣寺にて講演會（十二日）▲國民の自覺山臨大佐、▲人生の運命と信仰京藤義座何れも頗る盛會を極めたり▲聖典研究會（十五日）西崎宅にて橫本、長谷川、笹川、京藤、信隆の各師出演近來稀有の盛會なりき。

●備前

●和氣本成寺原田日勇師は例の如く常法鼓を打たれつゝあり▲十二月は本成寺婦人例會△同信會△山田村從野傳太郎氏宅▲二十二日河田原高矢順一氏宅に說敎會を催したり。因に同家は從來天台宗の處目下は順一氏令弟寺見高氏及武男氏、母堂擧つて深く日蓮主義に歸依し現に順一氏は東京にあり刀生家にして講妙會員たり、武男氏は敎職を奉じられしが、不幸先ほど逝去其追弔席の事とて多數來聽ありしといふ此日の演題不志不死なりき。

●廣島

●本照寺は大橫日蓮師近來大に活躍されつゝあり、十二月中、本照寺に於て十六座の法話を執行す辯士は大橫、溝口會旭、富之會榮の四師の外に、岡山より能仁事一僧正、姫路より中川日史文學士の二先生を招聘す▲又公會堂に三日本門宗長崎開乘、中川、能仁の三師出席▲本妙法華宗本經寺にて九日法華會講演、法華宗本下英學、大橫、長崎の三師出席△外に本照寺に四回開催、大橫、有來清重、江藤榮吉の四氏出席、▲一月十五日は新年會を開き、妙法雜誌發行の相談ある由なり。

●窪田利兵衛老逝去

本宗篤信家として聞えたる山口縣柳井の窪田翁は去る十二月廿六日忽然發病し廿七日午後五時靈山往詣の臨滅度を告ぐ、心身顯定にして恰も眠るが如く流石篤信家臨終の立派なるを覺したりと、廿八日廣島の大橫日蓮師導師となし、長久寺中村明法師、一乘庵の僧等に依り本葬を執行爾廿九日は供養式法話會を窪田義一氏は父母の恩大橫師生死に付述べられたりと因に本誌の課題和歌には曾て天位に拔け、又今回の課題にも應ぜられたるが恐らく之れが佳作の絕筆なるべしと、記者は翁とは十六七年前大阪蓮成寺にて面會したることあり、溫厚淸楚の人格なりしが惜むべし。

統一購讀料領收報告（最近領收の分）（餘は二月號に）

△金七圓也　中村謙藏殿
△金參圓也　黑野聖祐殿
△金貳圓也　中澤平五郎殿
△金壹圓參拾三錢也　勝妙寺
野村能忍殿
△金六圓六拾六錢也　金澤巖殿
△金壹圓四拾七錢也　常在寺
清水殿
△金壹圓廿錢也　有田宏道殿
△金壹圓拾錢也　高瀨純正殿
△金壹圓四錢也　上田日恢殿
△金壹圓也　友井能慈殿
中村春治殿
小高與之助殿
大坂天晴會殿
乾海甫殿
淺田定吉殿
小原正恒殿
森下馨殿
本庄寅太郎殿
△金九拾六錢也　井川幹殿

谷川兼三郎殿
石村堅四郎殿
遠坂憲治殿
石田智寛殿
鹽谷時重殿
關松太郎殿
竹內久三郎殿
川手海祥殿
杉村五百藏殿
坂下利三郎殿
辻本喜男殿
橫山甚之助殿
青木吉郎殿
小杉小二郎殿
佐藤喜四郎殿
平池岩吉殿
窪田利兵衛殿
入江善平殿
小島男殿
石橋甫殿
三村友藝殿
竹內久二殿
佐野龜作殿
本多孝敬殿
石原裕夫殿
山田秀太郎殿
岩城周善殿
△金八拾八錢也　岡部三藏殿
石浦謙二郎殿
△金八拾錢也　福井權藏殿

△金七拾二錢也　武田禮吉殿
金光友太郎殿
宗政盤次郎殿
三橫誠作殿
蒔田恒太郎殿
辨明靜夫殿
鈴木與四三殿
石原俊一殿
道脇淺次郎殿
鮏木信次郎殿
延井九二一殿
高橋三景殿
牧野友太郎殿
石橋友太郎殿
猪野友吉殿
千脇秋輔殿
佐原榮作殿
△金六拾九錢也　蘭田佐太郎殿
小木新吉殿
△金五拾六錢也　石井智明殿
鵜岡寄太郎殿
赤門幾次郎殿
野上馬吉殿
百田源太郎殿
伊藤磯太郎殿
伊藤久吉殿
岸川雲水殿
片岡修德殿
△金五拾壹錢也

本隆寺　鈴木殿
法華寺　家田殿
安井慎一殿
木村清造殿
齋藤海實殿
清水重太郎殿
坂井素登殿
齋藤憲妙殿
秋山新之助殿
樋口竹三郎殿
一妙寺　森上殿
妙了寺殿
川原新太郎殿
木村松次郎殿
加藤たま殿
稻葉芳之助殿
高木長次郎殿
黑澤行靜殿
正覺寺　石上殿
見性寺　佐藤殿
圓隆寺殿
播摩木壽殿
原賀愛次郎殿
菊野利三郎殿
多田房太郎殿
延福寺　梅木殿
圓明寺　兼平殿
長田又次郎殿
圓頓寺　吉田殿
木村榮次郎殿

小玉熊藏殿
加納廣淳殿
高見蠶次郎殿
小玉常一殿
惠珙寺　藤原殿
妙源寺　功刀殿
山口富次殿
觀瀨寺　宮崎殿
渡邊慶藏殿
長井直吉殿
北岡敬順殿
山本菊太郎殿
島田治右衛門殿
常敎寺　佐藤殿
金崎和吉殿
谷田清次郎殿
柳木彦一殿
牧孝太郎殿
奥野芳松殿
願正寺　今井殿
妙照寺　大町殿
本妙寺　桃井殿
實相寺　間宮殿
法華寺　藤山殿
石倉圓妙殿
妙仙寺　山本殿
對木せい子殿
登山俊三郎殿
宇都宮馬治殿
石田太吉殿
妙國寺　石田殿
林貞介殿
河田殿
東家料理亭殿
睹橫殿
末崎殿

圓德寺殿
伊藤又藏殿
實松寺　貫名殿
本成寺　麻生殿
與覺寺　青木殿
津輕家　執事殿
妙祥寺　見山殿
添田日圓殿
宇山昌太郎殿
本國寺　濱井殿
長德寺　大高殿
堀野幸作殿
妙正寺　鳥谷殿
片山新之助殿
妙榮寺　山邊殿
宮下直高殿
瀧波藤吉殿
海關要二郎殿
遠藤鶴松殿
法泉寺　池田殿
大法寺　中野殿
內船寺　志村殿
本能寺　石野殿
相內金藏殿
實松寺　槻保殿
法音寺　野田殿
佛代寺　竹內殿
中谷元一殿
日澄寺　松野殿
妙經寺　最上殿
井關芳松殿
永井平右衛門殿
西羅微德殿
堀田喜和次殿
高見忠藏殿
妙傳寺　釋殿

栗田眞輔殿
岩垣常吉殿
高橋英交殿
赤澤日雄殿
圓福寺　庭田殿
寶德寺　高野殿
吉川通遠殿
延壽寺　藤田殿
法線寺　古賀殿
淺間利三郎殿
妙國寺殿
高橋列五郎殿
妙法寺　栗原殿
遠照寺　藤本殿
堀田潮清殿
渡邊重作殿
渡邊常作殿
長井卽眞殿
久遠寺　朝日殿
木村行覺殿
押見春敎殿
△金五拾錢也　豐田說吉殿
石原應恒殿
藤掛與左衛門殿
石田半一郎殿
稻葉榮之輔殿
近江正端殿
山口彈正殿
木村十郎殿
及川眞能殿
石崎政清殿
西山鐘次郎殿
笠原幸三郎殿
橫堀治三郎殿

卜部喜太郎殿
山岡豐一殿
紫岡喜一郎殿
守谷末吉殿
森田洪殿
前刀寶清殿
大島力藏殿
橫田藤平殿
武田日興殿
服部新五郎殿
佐藤寅雄殿
大久保要四郎
稻田海素殿
早川敬殿
堀內三郎殿
堀田正介殿
尾崎永卍殿
方山正隆殿
川島阡司殿
景山佳雄殿
川合芳次郎殿
川村鐵太郎殿
加藤末藏殿
田沼久吉殿
山崎鶴之助殿
安田松慶殿
松井日等殿
福相寺殿
清水歸一殿
平田義勇殿
菱沼允升殿
中野平三郎殿
龜谷日了殿
佐藤豐太郎殿
畑榮明殿
小泉アサ殿

石井知漢殿
岩內榮次郎殿
高田安藏殿
上田順一郎殿
別所小三郎殿
淺井常敬殿
堀內良平殿
外松孫太郎殿
永島巖殿
山縣近吉殿
繁宮久達殿
望月小太郎殿
妙法寺　吉川殿
積田惣吉殿
內藤慶次郎殿
新萬吉殿
小宮全藏殿
松戸與惣次殿
山川端夫殿
內山榮次郎殿
最明寺殿
三田村圓通殿
藤方安太郎殿
佐藤海豐殿

磯部四郎殿
岡田新吉殿
久世卯三郎殿
時實秋穗殿
木門法華寺殿
田邊喜一殿
渡邊源次郎殿
前田木壽殿
赤羽磯太郎殿
農江義賢殿
小牧自然殿
佐野貫孝殿
志水美英殿
太田溫靜殿
渡邊宗一殿
龜谷泰山殿
今永貫殿
野村智秀殿
野村房次郎殿
北原觀朗殿
蓮省寺殿
勝田甚吉殿
聖成秀尊殿
秀香寺殿
伊藤ナヲ殿
△金四拾三錢五厘也　西村松五郎殿
△金四拾貳錢也　江森榮助殿
△金四拾錢也　妙國寺　瀧井殿
坂木惠大殿
△金參拾參也　吉武永藏殿
△金參拾貳錢也　藤澤治郎平殿

△金二拾四錢也　山口萬吉殿
松田友信殿
上坂信殿
△貳圓也　山田豐次郎殿
△壹圓也　瑞岡甲松殿
△參圓也　布目潮深殿
△以下次號

謹賀新年

統一節

開祖　宇都宮主計之介　敬白

門人　宇都宮太郎　敬白

嵐雪會を十二月號に發表するや左の二氏の外にも續々賛意を表されつゝあり

嵐雪會を賛す

中村曙

■嵐雪會組織は時期に適せる企と存候。時代の變遷とは云へ、二百十餘年常檢寺實前の傍に嵐雪櫻を眺めつゝ安らかに眠れる彼の雪翁の墳墓を移動せしむるは俳味を解する側の人士は遺憾に思はるべきも、其事業（記者曰、今回門下統合學舍を指す）にして爲宗的、發展的なりせば嵐雪翁も微笑快諾さるゝを信ず、況んや今回嵐雪會の起るあるを、去月貴寺訪問嵐雪の墓に詣し、唱題三聲、之れを見れば清楚なる花、香煙の殘灰を認むるさへあり、其誰人の殊勝の業なるかと心嬉しく存ぜし次第なり。就ては予は本企には大賛成の意を表す、末統には宇貫もあり、全國を尋んには讃仰者極めて多かるべし、兄足下は一大事因緣の義に依れる者、大に盡して遺漏なからんことを希ふ。

文學士　小林一郎

拜啓十二月號統一誌上の嵐雪の會の記事拜見いたし、常檢寺に墳墓あるをはじめて承知仕候。小子年來雪翁の句を好み候につき、何か御催しも候はゞ御仲間に加へ被下度奉希上候。

■統一を讀む　瀧の川　松井フク

（前略）益ゝ爲宗爲法御精勵の由承り慶賀の至りに存候。過般は忝くも統一御送與を賜り誠に有りがたく早速拜讀仕候處、實に佛恩の廣大、日蓮上人の大精神大抱負大慈悲には思はず感涙に咽び申候此後とも何卒毎月御送附下され度、よろしく御賴み申上候（後略）

■新年會

はるゝ〳〵と里をさかりて住む友の雪の深山に炭送らばや　伊藤巨雀

くもやあらぬ黃にくれなるにあけにけり朝日たゝさす雪の山の端　同人

うごきなき御代をことほく遠方の山おもしろき今朝の雪かな　（麹町）守谷秋香

高砂の尾の上の松に雪降りて見越しの空に鹿田鶴の聲　守谷汲月

■新調

もみ裏の袂かへせば雪灯の火影にゆらぐ水仙の花　芳子

思ひ出の二十年の春やはなやぎしもすそに染めし水仙の花　同

奥庭の雪見燈籠のかげにさく水仙の花の君に似る　はなぶま

泉殿にまちはび給ふ人ありて文の使の房あかきかも　同

●統一閣日割

講演日割左の如し

一月
十四日　木多貌下
同　冬野口師
廿一日　今成師
同　熊井師

二月
四日　木多師
十一日　同
十八日　同
廿五日　同

山井師
鈴木師
川崎師
龍田師

松本師
木村師
大木師
森師
高木師

（未完）

新年の御慶自他幸甚

本多日生

恭賀新年
野口日主
鈴木日雄
中村日錦
石川日隆
松本日堅
晴顯

正賀
能仁日斌
國友日一

正賀
井村日城
關田日咸

正賀
今井日東
笹川日根
成田日山

恭賀新年
竹内無着
齋藤日有
土屋日英
秋山日乾
國分日顯

恭賀新年
今井日誓
飛山日堂
金光日叔
井口日甫
笹川日善
成田日碩

篠崎安五郎

恭賀新年
森川日英
渡邊日泰
櫻井日乾
木成日道
土屋日泰
山岡日眞
前田日會
中田日容
山本日行
島田日安
山田日洲
朝倉日航
秋葉日照
黑澤日快
池澤日敎
金坂日慈
神田日兆

恭賀新年
秋葉日
川葉日
森川日
日寬日
玄日虔
大日行
梶原日
原崎日
木通日
津英日
暮日應
川照日
原勇日
種文靜

『統一』寄附金

一金壹圓也　木村義明殿
一金壹圓也　山名日宗殿
一金壹圓也　猪又金太郎殿
一金五圓也　千葉縣大網婦人會殿
一金參圓也　窪田貞二殿

右謹て御受申候也　統一主任　松尾皷城

謹賀新年

近衛歩兵第四聯隊第二中隊第一班

草切信榮

恭賀新年

恭賀正法興隆

顯本青年布教團
內竹山山秋河國稻
田本野山分子
顯賢誠見乾顯障
領乘心中英有義

謹賀新年

東京府小笠原父島顯本教會
擔任教師　吉塚通榮

不便の地に候へば年賀の禮缺き申候

謹賀新年

神戸　上田智量

賀正

名古屋市中區南鍛冶屋町三
佛具佛器製造　龜井鐵太郎

謹賀新年

日宗法衣專門

飯田法衣店

京都市佛具屋町五條北
振替口座大阪六八四七

定價表御申越次第何時にても御送申上候

賀正

加賀料理

加能亭

日本橋區公園入口

謹賀新年

●位牌木魚卸小賣

●佛具一切陳列仕置候●

各本山御用達
佛像佛具
一切卸小賣

定價表郵稅四錢

小賣部　京都三條小橋東入南側
三法堂佛具陳列場
長距離電話中貳七八參番
振替口座東京貳〇七壹
大阪四貳五九

卸部　京都市三條通小橋西入
本舗　三法堂　藤田總治

恭賀新年

宮澤種吉　岩井庄三郎　宮東伊藤　畑德兼　岩松小佐　野本原藤　直有正鐵　英信恒太郎　小林一郎　木內重四郎　山岡順太郎　清岡長言　矢野直記　宮岡茂　山田三郎

身讀會

正賀
京都法華會
法華會

年賀
前田日教　坪永日監　長谷川日濟　岡本圓正　宮代向政　龜澤日憲　赤羽日揮　田邊是教

賀恭
宮澤種吉　岩井庄三郎　宮東伊藤　畑德兼　岩松小佐　野本原藤　直有正鐵　英信恒太郎

年賀
大阪　天晴會
神戸　天晴會
天晴會

賀正
山田秀太郎

賀正
岡山『日蓮』發行所
同人

新年
田川金太郎
內田市四郎
小林銀次郎
猪又金太郎

正賀
石塚日郎
三上義徹

正賀
安川繁種

正賀
湯井吉太郎

品川正法護持會

恭賀新
大橋日襲
田久保日城
松田宏槃
大須賀玄遊
伊保內敎精
田島義潤
石渡英哉
伊藤寶樹

年
矢野聖顯
窪田純榮
窪田貞二
熊井乾堂

一德會　增田名古四郎

賀正
統一編輯局
高木洽地
松尾皷城

恭賀新
山名日宗

恭賀年
小西佐平
小西眞雄
小西日喜
不惜

恭賀新年
中村謙藏

恭賀正
吉永日洋
熊井本光
橫山鐵太郎

賀正
中川日史
岡順太郎
岡長言

賀新正
影山謙二

賀新正
池澤日辰

恭賀年
木村義明
大森躰勇
森本憲章

第廿一年　統一　二月號

（第二百六十四號）

課題和歌谷梅發表……子尋　清岡長言
信念の啓發と策勵……大僧正　本多日生
我本尊觀と生死觀……海軍中將　宮岡直記
日蓮門下對各宗の法義大抗爭
の起因は村上專精博士の宣言……松尾皷城
に含まれたり……熊井鷺城
村上博士の兩上人の對照に就て……一記者
スタール博士と日蓮主義……山根青村
機微譚語……笹川日堂
宗門史考……窪田純榮
十七字詩法門……戸水萬頃
謠曲中の法華經……
祖師日蓮聖人御傳……一記者
統一俳句……統一團報……其他數件

發行事務取扱所　東京小石川白山前町　統一編輯所
振替口座東京三三五三三番

（第二十一年一月卷）　「統一」　（第二百六十三號）

▲初版賣切○○○
△二月上旬再版○○

大僧正　本多日生著
法華經講義　全二冊

▲洋裝菊版總布上製函入美本
上卷　壹圓八拾錢（壹千頁）
下卷　壹圓八拾錢（壹千頁）
●各卷分賣す
●二冊の小包料（內地二十錢、滿洲朝鮮五十錢、臺灣樺太四拾錢）
●一冊の小包料（內地十二錢、滿洲朝鮮四十錢、樺太臺灣三十錢）

大僧正　本多日生著
第一版、二版忽ち賣切三版
日蓮主義
三五判洋裝金文字入▲天金縞函入美本▲紙數六百二十餘頁
▲定價九拾五錢　郵稅六錢
▲宗教の必要と其撰擇▲神儒佛三教と日蓮上人▲國民道德と宗教の信仰▲破佛論に對する批判▲統一的佛教觀▲釋尊の出家成道▲佛教信仰の體系▲法華經講義▲日蓮主義の梗概▲修法次第▲方便法▲自我偈▲自調▲本統組文要文
●賣り切れざる中に申込あれ
申込所　東京市小石川區白山前町　統一編輯所
振替口座東京三三五三三番

日蓮各宗　寺院　御僧
法衣　草木
京都　三條通烏丸東入ル町
直に御聯想下され候儀に候

恭賀新年
草木店
電話中七三五番
振替口座東一一五五九番
淺草區三好町二番地

恭賀新年
草支店
電話下谷三四三四番
振替口座東二四五六八番

相變らず御引立奉希上候

謹賀新年
安田主人敬白

●○○○○○○○○○○○○○●
○日蓮各宗本山御用達○
○京都市寺町通六角西南角○
○念珠商　安田商店○
○二百數十年日蓮各宗の念珠を商ひ來り候老舗に候御信用の上御用命願上候○
●○○○○○○○○○○○○○●
各位の萬福を祈る

賀正
不相變乞御引立
●苟も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候●

佛像佛具
位牌木鉦　調度所
宮殿憧天蓋其他一式
▲普通品定價郵券弐錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙滿寺
大本山本願寺
日宗各教團
御用達
京都寺町四條南大雲院前
舊名「乾清」事佛師
辻井岩次郎
振替大阪八一五七番
電話下三二五八番
多少に限らず御用奉願上候也
●御用仰せ被下候はゞ叮嚀深切を旨と致候●

奉賀新年
御念珠各種
弊店の特色は實用を旨とし從來調進仕り候へば多少に不拘御用命願上候
市都市寺町通蛸藥師下ル
念珠商　小野嘉助
振替口座大阪一九七二〇番

（東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍印行）

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英西郎△印刷人鈴木日雄（▲本誌定價一冊八錢郵稅五厘▼）

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正六年一月十五日第三種郵便物認可
統一事務取扱　東京市小石川區白山前町　統一編輯所